

茨木の魅力ある高校紹介

茨木には他にない特色ある活動で、具体的な地域連携を実現している学校があります。
今回はその中から「大阪府立茨木工科高校」を紹介します。

大阪府立茨木工科高校



茨木市春日にある校舎

「輝く自分を見つけよう」北摂唯一の工業科の高校

昭和38年に大阪府立茨木工業高等学校として開校。平成17年に大阪府立茨木工科高等学校と改称し、現在、約900名（女子30名）が3つの専門系（機械、電気、環境化学システム）と工学系でそれぞれ技術を学び、多様な資格取得を目指しています。工学系では高大連携授業などを通して、理工学系大学への進学を目指し、将来世界で活躍できるエンジニアの育成を目標としています。全ての系で3年生は「課題研究」の授業があり、各自のテーマに取り組み、毎年生涯学習センター「きらめきホール」で課題研究発表会が行われます。また、地域連携活動を授業と関連させながら取り組んでいます。クラブ活動も活発で全国でも多くの実績をあげています。



課題研究で「おもしろい」自転車を作ってみた

モノづくり技術を活用した地域連携活動

地元や東北地方の小・中学校にアルミ製の朝礼台を作製して寄贈しています。オーダーメイドなので使いやすさが大好評です。茨木市の恒例行事となった「いばらき光の回廊～冬のフェスティバル～」では、生徒がイルミネーション・オブジェの製作、施工をお手伝いしています。北摂地区の中学校へ「人エイクラをつくろう」などをテーマに出前授業を実施しています。プチプチとした食感の様々な味の人エイクラを作って試食することができ中学生にも大好評です。

現在、茨木工科高校の電波塔を利用して、宇宙ステーションと春日小の児童との通信を行う事業（ARL ISSスクールコンタクト）の実現に向けて取り組んでいます。

これらの活動は生徒が自ら学んだことを確認する良い機会になっています。また、近隣の道路・公園などの清掃活動には、生徒会を中心に多くの生徒が参加しています。

活発なクラブ活動

自転車部は20年連続で全国大会に出場し、全国レベルで活躍しています。ほぼ毎日、亀岡までを2時間で往復します。取材時は体育館で黙々と基礎体力向上に励んでいました。

機械研究部は、近畿代表として全国ロボット相撲大会に2年連続出場しています。

そしてもっとも注目されているのは SST.R&D（宇宙科学技術研究開発部）です。目標は「人工衛星の打ち上げ」で、全国の工業高校11校が協力するプロジェクトに参加しています。茨木工科高校は人工衛星の心臓部ともいえる、宇宙空間での過酷な環境にも耐えられる太陽電池と各機器に電気を分配する装置の開発を担当しています。クラブ活動とはいえ、50年前の創立時の校歌に「宇宙を目指す理想」がうたわれており、学校の教育目標でもあります。

これらの活動を通して生徒がいろいろな分野に育っていくことを願っています。

取材の感想

古い工業高校のイメージとは大きく違い、近代工業発展を支え、宇宙開発にも夢をはたかせる新しい工科高校の姿に触れることができました。生徒達は「いろいろと考え、工夫するのが楽しい」「ものづくりが好き」と目を輝かせていました。高い理想を抱き、実現へ向けて着実に教員と共に歩んでいる若者たちの姿にすがすがしさを覚えました。

市民インタビュー 第61回

この人に会いたくて

茨木ふるさとの森林づくり隊
てんぼ よしひろ
天保好博さん

多方面に関わりを持つ天保好博さん。里山森林ボランティア、茨木市環境審議会委員、安威川ダムファンづくり会、梅花女子大学非常勤講師、立命館大学育てる里山プロジェクト、フェアトレード推進とまさにマルチな才能を発揮されています。今回は茨木の里山の現状と課題を熱くわかりやすく話してくださいました。



■大学で森林生態学を学ばれたきっかけは

生まれは大阪市内の十三で、周辺は埋め立て地とどぶ川でした。そのころは淀川も汚くて、子どもの頃は自然とは無縁の生活をしていました。その反動か自然に興味があり、山登りが好きで、大学では森林生態学を専攻しました。京都、福井、滋賀の県境にある京大演習林「芦生の森」に6年間通いました。時間と共に植物群がどう変わってきたか、過去から現在に至るまで、そして未来に向けて森がどのように変化していくのかを研究しました。その後、家業の洋菓子とコーヒーの店を継ぎ、フェアトレードの活動にかかわったりもしています。

■茨木の山は

薪や焚き付け用の落ち葉を集めるためのアカマツ林で、マツタケがたくさん採れました。ところが40年ほど前に松くい虫が大発生した上に、燃料革命でガスや電気、灯油に取ってかわられ薪が使われなくなりました。そのためアカマツ林は放置され、雑木が侵入して山の植生も大きく変わりました。現在の里山は落葉広葉樹が多数派ですが、茨木も暖かい土地ですから、将来的にはカシ、シイ、ツバキなどの常緑の照葉樹林が中心となり、紅葉があまり観られなくなるかもしれません。

■森林ボランティアとして

茨木の山の20%は人工林で手入れが必要です。太陽光を森の中に入れるために間伐したり倒木処理をしなくてはなりません。一人でも多くの人にボランティアとして参加してもらって、茨木の里山・森林整備に力を貸していただきたいです。ボランティアの人数が増えれば力も大きくなり、自分が手掛けた山ですと、自然と愛着心も湧いてくるのではないのでしょうか。

■野生動物が山から下りてくるのは

野生のイノシシやクマが山から下りてきて大騒ぎになることがあります。山の開発によりエサがなくなったからだと思っている人が多いのですが、実はそうではありません。自然は回復していますし、山に食べ物は豊富です。里へ下りると簡単にエサにありつけることを動物たちが学習してしまっただけです。餌付け禁止、正しいごみ出しはもちろんのこと、ヒトと動物の棲み分けが必要です。そのためにも、奥山と里との境界にある里山の存在は重要です。

■北部地域の開発

茨木の森が貴重なのは滋賀県から兵庫県に至る広大な森の一部であるということです。今、茨木は安威川ダム、新名神高速道路、彩都と開発事業が集中しています。開発により森が分断されては環境としての機能が果たせなくなります。これから北部地域の森林環境をどのように守っていくかを考えなくてはなりません。山の話をする者が一人くらいいてもいいだろうと思い、茨木市の環境審議会のメンバーにも加えてもらっています。

■関心を持って

市街地に暮らす人はもっと真剣に山に対して目を配ってほしいと思います。時々山へ行って、山のことを考えてみてはどうでしょうか。里山での人の活動が停止してしまうと、野生動物は確実に町へ下りてきますし、環境保全にはコストがかかることを知ってもらいたいです。大阪には緑が少ないと言われていますが、それは大阪市内に限ったことで、北摂、河内、泉南は緑が豊かです。水道水一つをとっても、山に降った雨が地下水となり、川として流れ出るから利用できるのです。一方、森林が残っていないと雨がたくさん降れば災害のもとになります。水を通じて確実に私たちは山とつながっているのです。

※フェアトレード（Fair Trade：公正貿易）とは、発展途上国で作られた作物や製品を適正な価格で継続的に取引することによって、生産者の持続的な生活向上を支える仕組みです。



森林ボランティア活動

「立命館大学育てる里山プロジェクト」
新名神工事の開発で消える里山の木を立命館大学のキャンパスに移植して育てています。